

鹿児島市におけるパブリックアートの認知度

～景観演出によるまちづくりの効果と評価に関する研究 その1～

正会員○鮎川 武史³⁾
同 田之頭七絵³⁾
同 友清 貴和¹⁾
同 山下 剛²⁾

1. 研究の背景と目的

最近の街づくりでは、都市景観を積極的に演出して行くという動きが高まり、街角や公園にパブリックアートやモニュメントを配置したり、夜景を演出するためライトアップを行ったりする手法が取り入れられるようになってきた。

ところがこれらの景観演出事業は、事業主体である自治体が計画者であり、設置場所や作品内容などに関する情報は、それが完成するまで住民に流れてこない場合が多い。更に、これらの作品の設置後は、住民生活に有害でない限り、ほとんど住民の話題に上らない。また、事業主体である自治体も、その効果の検証や評価は行っていないのが実状である。

本研究は、上述のような都市景観の積極的な演出のなかで、全国的にも最も数多く展開されている、パブリックアートまたはモニュメントの設置事業に的を絞って、街づくりの効果と評価(具体的にはP.A.等に対して、住民はどのように認知し評価しているか、まちづくりにどのような影響を与えているのか)を行い、今後の積極的な景観演出による街づくり計画に対する、新たな知見を得ようとするものである。

2. 研究の方法

①認知度調査Ⅰ(全体認知度=パブリックアート+その背景): それぞれの作品が、設置場所や雰囲気も含めて、住民にどの程度認知されているか、作品の写真と作品の設置場所を番号で記入した地図を被験者に示し、知っている作品と地図番号を対応してもらった。更に認知理由や作品に対する印象等もアンケートに答えてもらった。

②認知度調査Ⅱ(単体認知度=切り取られたパブリックアートそのもの): 個々の作品単体が、住民にどのように意識・評価されているか分析するために、パブリックアートの写真を、スキャナーでコンピュータに取り込み、パブリックアートと背景を切り離したり合成する画像処理をした上で、これらの写真を被験者に見てもらい、認知しているか、どの写真が好ましいか、パブリックアートのある場所を活用したことがあるか等、アンケート方式で答えてもらった。

本研究では、以上2つのアンケートを分析し、景観演

出のモチーフであるパブリックアートが、街づくりにどのような効果を上げているか・住民にどう評価されているか明らかにした。

本稿では①でいう全体認知度と②でいう単体認知度のデータを分析した結果を中心にまとめた。

3. 認知の傾向からみた認知度調査Ⅰの調査結果

【認知度が高いパブリックアート】

「西郷隆盛像」は約80%の人が正確に認知している。これは設置場所が交通量の多い国道10号線沿であり、更に鹿児島を代表する歴史的人物をモチーフにしていることが大きな要因として考えられる。「若き薩摩の群像」は昭和57年に鹿児島市の人口50万都市達成を記念して設置されたもので、90%の人が正確に認知している。これは鹿児島の西鹿児島駅前広場という設置場所の良さや形態が大きいこと等から認知度が非常に高いと思われる。「母と子の群像」は昭和59年に文化振興・景観整備の為のモニュメント建設事業の一環として設置され、約60%の人が認知している。これは、市内の主要道路である電車通り沿いの高見橋の欄干に設置されているため、やや高い認知度であると思われる。「悠雄」はロマンチックオブジェ事業によって平成4年に設置されたパブリックアートで、上記の3つのパブリックアートと比べて設置時期は新しいが、認知度は50%強と比較的高い。これは市役所前のみなど大通り公園という設置場所のわかり易さが要因と考えられる。「刑務所門跡」は刑務所撤去後鹿児島アリーナ建設に当たり、パブリックアートとして保存・再利用されたもので、石造り、保存運動のためか比較的高い認知度は高い。

【設置場所を間違えて認知】

「島津斉彬公之像」は大正6年に設置されたもので、古くからあるものだが、設置場所を間違えて認知している人が非常に多い。原因は設置場所が神社の境内という少々目に付きにくい場所であるためと思われる。

「星空と彫刻と滝のオアシス」は平成4年に設置されたもので、パブリックアートそのものを知っている人は多いが設置場所の誤認している人が多い。これは天文館アーケード沿いに設置されているため、アーケードを通過する際に目にしている人が多いことと、似たような噴水型のパブ

The recognition degree of public-art in Kagoshima City.

The study of the effect and the appraisal of town-design by the production of the scene.

Takesi Ayukawa, Nanae Tanokasira, Takakazu Tomokiyo and Gow Yamasita

リクアートがアーケード内に多いことが原因と思われる。同じく天文館アーケード内に設置されている「ししおどし」、「天空をめぐる星」も同様の傾向が見られる。

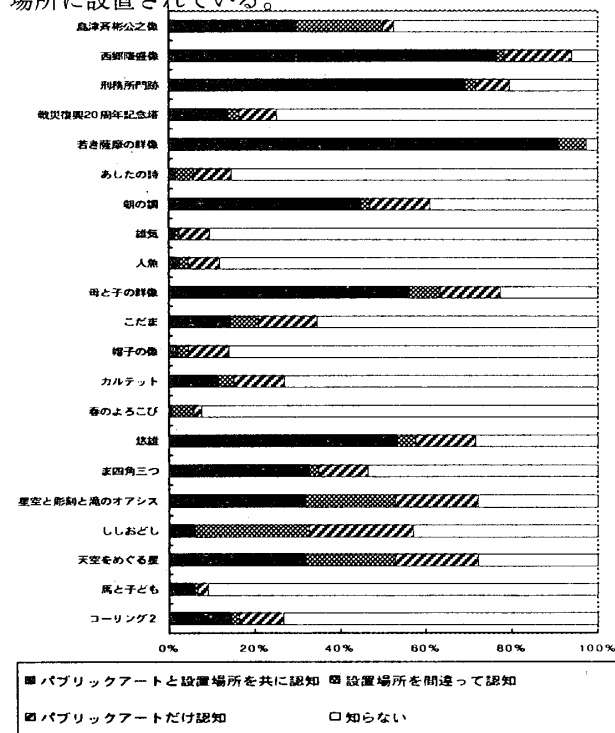
【パブリックアートだけ認知】

「西郷隆盛像」は、正確に認知している人が多いが、パブリックアートそのものしか知らない人も多い。これはパブリックアートが市内のどこに位置するかよりパブリックアートだけを印象的に記憶している人も多いことを示している。電車通り沿いの高見橋にある「母と子の群像」についても同様の傾向が見られる。「朝の調」も認知度は低くないが、設置場所を知らない人も多い。どの様な場所にあるかということよりもパブリックアート単体のインパクトで記憶に残っているようだ。

4. 認知の傾向からみた認知度調査Ⅱの調査結果

【認知度が高いパブリックアート】

「西郷隆盛像」と「若き薩摩の群像」は特に認知度が高い。この2つのパブリックアートは、単体の知名度が高いだけでなく、それぞれ交通量の多い国道沿い、交通の中心である駅前広場に設置されており、多くの人が目にする機会があるため背景まで熟知されていると思われる。ついで認知度が高い「朝の調」は市民文化ホールの利用者の多さが、「母と子の群像」は橋の交通量の多さが反映されていると思われる。これらの4つのパブリックアートはいずれも人々の目につきやすく、また来訪者も多いと思われる場所に設置されている。



【図-1】認知度調査Ⅰ（全体認知度）

【背景を間違っって認知】

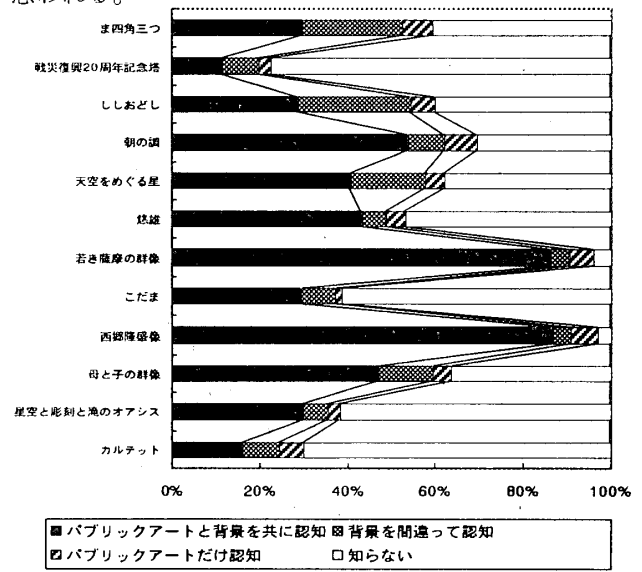
鹿児島一の都市公園である中央公園に設置されているため、「真四角三つ」は作品単体の認知度は低くないが、背景の誤認が最も多い。公園という場所柄街具として利用されても、人々は背景まで意識していないと考えられる。ついで「ししおどし」、「天空をめぐる星」が、背景の誤認が多い。この2つは、天文館アーケード沿いに設置されているが、人々はアーケードを通過する際に、パブリックアートを目することはあっても、背景まで意識して見ることは少ないのではないかと考えられる。

【パブリックアートだけ認知】

前述したように「西郷隆盛像」は認知度は高いが、パブリックアートそのものしか知らない人も多い。これはパブリックアートがどのような景観の中にあるかよりパブリックアートだけを印象的に記憶している人も多いことを示している。「朝の調」でも同じ傾向が見られた。

6. まとめ

調査の結果、パブリックアートの設置という景観演出による街づくりにおいて、どのような作品を・どのような人が集う場所で・どのような周辺環境や景観の中に設置するかで、認知度あるいは認知の傾向には大きな差が生ずることが分かった。そしてそれぞれのパブリックアートのデータを見る限りでは、全体認知度と単体認知度には微妙な差異が生じている。これは地図上での設置場所を知っていることがパブリックアートのある景観を知っていることに直接結びつかないことを示している。以上のことから、認知度に影響を与えると思われる要因を軸として全体認知度と単体認知度の相互比較・分析を行っていく必要があると思われる。



【図-2】認知度調査Ⅱ（単体認知度）

- 1) 鹿児島大学教授・工博
- 2) 鹿児島大学助手
- 3) 鹿児島大学大学院

- Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering Univ. of Kagoshima, Dr. Eng.
- Research assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering Univ. of Kagoshima
- Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering Univ. of Kagoshima